

〈実践論文〉

「地域再生」を意図した小学校歴史学習の開発 —ふるさと学習「かめおか学」亀山城プランを事例に—

Development of elementary school history learning intended for “Community egeneration”

— Hometown Learning “Kameoka Gaku” Kameyama-jo Castle plan example —

京都文教大学 橋本 祥夫*¹

亀岡市みらい教育リサーチセンター 山下 正己*²

要約：我が国では、少子高齢化により社会が激しく変化し、人口減少、財政難等の課題も深刻化することが予想される中、各自治体では「地域再生」が喫緊の課題となっている。そうした状況を背景に、子どもたちが自分の住む地域に愛着を持ち、将来の地域の担い手になるために、「ふるさと学習」が「総合的な学習の時間」を中心に各地で展開されている。京都府亀岡市でも教育振興基本計画に基づき、ふるさと学習「かめおか学」が実施されてきたが、社会科では実践がほとんどされていないのが現状である。

歴史学習については、地域の史跡や文化遺産を教材として取り上げる例は多く見られるが、「地域再生」という視点で取り上げる例は少ない。人口減少に伴い、地域が衰退していく状況の中、過去にその地域が繁栄していたことや歴史的な舞台として意義がある地域であることを知ることで、自分たちの住む地域を誇りに思い、地域を見直す契機になる。地域の歴史を掘り起こし、教材化することにより、「地域再生」の視点からの歴史学習が展開できる。また、身近な地域を取り上げることで子どもたちの学ぶ意欲を喚起させることができる。

城は、大抵はどの地域にもかつてあった。現存している例は少ないが、城跡や遺構ならあるはずである。近世以降には城下町を形成し、それが町づくりに反映し、町並み、掘、町名など、当時の様子を窺わせるものも多数残っている事例も多い。したがって、城は町のシンボリックな存在になりうるので、それを中心に自分たちの住む町を再認識、再評価するには適した教材だといえる。教材化は簡単ではないが、地域の資料館や博物館と連携すれば、可能となる。

地域の歴史を掘り起こし、教材化することにより、「地域再生」の視点からの歴史学習を展開することが必要である。本研究では、地域の城郭に焦点化し、「地域再生」の視点による歴史授業の開発を目的とする。

Key words：地域再生、ふるさと学習、地域学習、歴史学習、城

1 研究の背景と問題の所在

1-1 「地域再生」を視点とした社会科学学習の構築

今後、少子高齢化により社会は激しく変化し、人口減少、財政難等の課題も深刻化することが予想される。各自治体では「地域再生」が喫緊

*¹ Yoshio HASHIMOTO
Faculty of Child Education, Kyoto Bunkyo University

*² Masami YAMASHITA
Kameoka City Future Educational Research Center

の課題となっている。そうした状況を背景に、子どもたちが自分の住む地域に愛着を持ち、将来の地域の担い手になるために、「ふるさと学習」が「総合的な学習の時間」を中心に各地で展開されている。例えば、京都府宇治市では、市内の全ての小中学校の総合的な学習の時間（以下、総合学習）で「宇治学」を実施している（橋本ら、2020）。

京都府亀岡市では教育振興基本計画に基づき、ふるさと学習「かめおか学」が実施されることになった。当初（平成20年）は各校にふるさと学習担当者が置かれ、年度末に実践発表会が行われるなど積極的に取り組まれたが、現在は形骸化している。「ふるさと学習」の教材が校区の文化財中心であったため、学習指導要領との関連が弱く社会科などで年間指導計画に組み込むことができていなかったことが大きな要因の一つと思われる。「地域再生」を視点とした学習は総合学習を中心に展開されている。

峯岸（2010）は「地域に根差した社会科」実践の変容について、以下のような時期的傾向をあげている。

- ① 1970年～74年：地域の現実や民族的課題に目を向けた、実践の模索期
- ② 1975年～81年：地域における人々の行為と社会事象とを関連付けた、実践の拡大期
- ③ 1982年～90年：子どもの認識を視野に入れ多様な授業が開発された、実践の継承・発展期
- ④ 1991年～99年：現代社会の課題を視野に入れ地域の課題をとらえ直した、実践の転換期
- ⑤ 2000年～05年：生活科や総合的な学習等との関連を図る実践の展開、地域の再生・創造に関する実践の創造期

峯岸が示したように、近年では地域に根差した学習は総合学習を中心に活発に行われており、「地域再生」を視点とした学習も社会科よ

り総合学習で行われている傾向がみられる。だからこそ、「地域再生」を視点とした社会科授業の構築が必要である。

また前田（2017）は、「地域をともにつくる諸実践は、いずれも総合的な学習の時間前面に出ており、社会科をはじめ、他の教科や領域をひとまとまりの単元として再構成する教育課程開発が不可欠となっている」（p.27）と述べ、社会科教育における地域学習の重要性を指摘した。

「地域再生」に社会科教育はどのように向き合っていくべきかということは、これまで社会科教育の学会でも広く議論されてきた¹⁾。「地域再生」を担う人材育成をめざす社会科授業を構想した竹内（2017）は、「自らの生まれ育った地域をいかに肯定的に捉えることができるか、高校までの社会科授業の果たす役割は小さくはない」と述べ、「学校教育の場における地域学習は、地域総がかりによる「地域再生」を担う人材育成をめざした取り組みの一環に明確に位置づけなければ、真のねらいを達成することが出来ないのである」（p.2）と述べている。「地域再生」の視点から地域学習を構想した三浦、篠塚（2017）は、「地域学習を通して「地域再生」を担う子どもたちを育てていくには、地域学習を単なる体験活動や地域調査の技法を学ぶ場とするのではなく、地域で生きる子どもたちにとって意味のある学習でなくてはならないのである」（p.15）と述べ、社会科授業づくりの視点として以下の4点を挙げている。

- ① 学習者が地域資源や日常生活の中にある地域の価値を再評価するプロセスとして授業を構想すること
- ② 質の高い地域調査を基礎に地域問題を総合的・体系的に捉えること
- ③ 学習者自身が学習を通して地域に対する肯定感を醸成し地域に生きる意味を深く内省する過程として授業を構想すること

④ 地域の大人に学び、大人と共に学ぶ学習機会を設定すること

前述の前田は、「社会科で地域の現実と諸矛盾を、歴史的経緯の時間軸から把握させ、地域の将来を子どもなりの眼差しと手法から模索させる」ことが重要であると指摘し、「そのような教育実践が大人に地域を再認識させ、共同して地域づくりに向かう契機を提供している」(p.27)と述べている。

1-2 歴史学習において「地域再生」をめざす意義

歴史学習については、地域の史跡や文化遺産を教材として取り上げる例は多く見られるが、「地域再生」という視点で取り上げる例は少ない。「地域再生」という視点で過去の地域を見直すことで、歴史の意味を考えさせることが必要である。人口減少に伴い、地域が衰退していく状況の中、過去にその地域が繁栄していたことや歴史的な舞台として意義がある地域であることを知ることにより、自分たちの住む地域を誇りに思い、地域を見直す契機になる。本研究では、「地域再生」の視点から、地域教材の開発による歴史学習を検討することで、「地域再生」に視点を当てた歴史学習を構想した。

なお、第4学年の開発単元でも地域の歴史は扱う。しかしそれはあくまでも地域の歴史であって、日本全体の歴史との関わりで考えるわけではない。日本全体の亀岡、つまり自分たちの地域との関わりで日本の歴史的な事象をとらえさせることで、自分たちの地域が歴史上果たしていた役割を理解することができる。そのことにより、過去の歴史のつながりから現代をとらえ直し、「地域再生」の意識がわくのではないかと考えた。地域の文化遺産を取り上げることにより、地域を見つめなおし、「地域再生」の視点を持つことが可能となる。したがって、歴史学習だからこそ「地域再生」の視点を持つこ

とが重要である。

学習指導要領の「内容の取扱いについての配慮事項」では、以下のように示されている。

(3) 博物館や資料館などの施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などについての調査活動を取り入れるようにすること。また、内容に関わる専門家や関係者、関係の諸機関との連携を図るようにすること。

ここでは、「地域にあるこれらの施設を積極的に活用することによって、児童の知的な好奇心を高め、学習への動機付けや学習の深化を図ることができる」としている。さらに、「第6学年での我が国の歴史学習などでは、身近な地域や国土に残されている様々な遺跡や文化財、歴史博物館などを直接訪ねて観察・見学したり調査したりする活動を組み入れることができる。このことにより、児童は一層具体的に学習できるようになり、学習のねらいを効果的に実現するとともに、歴史に対する興味・関心を高めることができる」としている。

堀田ら(2020)は大学生を対象とした調査により、「小中高で受けてきた授業を初めてとして、自らが住む地域の歴史に目を向けるきっかけが少なかったものと推察され、歴史教育を行う側も地域の歴史を教材化しようという意識が強くないのではないか」(P113)と分析している。

土屋(2013)は、地域の歴史を学習に取り入れる意義について「地方史研究の成果をもとに、近年、格段に整備された郷土資料館の収蔵資料を利用したり、町並みや遺構から歴史を読みとったり、聞き取りを行ったりという体験的学習を通じて新しい具体的な歴史像を主体的に形成できる子どもを育成できるであろう」(p.226)と述べている。

本研究では、土屋が述べているように地域の資料館と連携して地域教材を開発し、絵図などの史資料と町並みや遺構をもとに新しい具体的

歴史像を主体的に形成できるようにしたい。そのことにより、「地域再生」の視点からの歴史教育が展開できると考える。

2 研究仮説と研究目的

歴史を過去のこととして終わらせるのではなく、歴史に学び、現在、そして、未来を創造するためにその学びを活かすことで、「歴史を学ぶ意義」を考えさせることができる。地域の歴史を掘り起こし、教材化することにより、「地域再生」の視点からの歴史学習を展開することが必要である。本研究では、地域にかつてあった城郭に焦点化し、「地域再生」の視点による歴史授業の開発を目的とする。

3 「地域再生」を意図とした歴史学習の視点

小学校社会科における歴史教育と地域教材について中瀬（2019）は「『歴史っておもしろい』と感じさせるためには、学習の仕方がわかり、自分と関係あることを学ぶということが重要なことである」と指摘した。しかし、前述の堀田らの教員を対象にした調査では、「現在の若手教員たちにとって、積極的に地域教材を開発し活用しようという意識はみられない」（p114）という結果となっている。

中瀬や堀田は地域教材を歴史学習として行うことの重要性を示し、実践研究を行った。中瀬の実践では、地域にある城跡が織田軍による紀州攻めの際に使われた城であることから、それを教材化し、自分たちの地域との関連から歴史に関心を持たせようとした。また堀田の実践では、仙台市内の小学校の実践で、教科書で学んだ参勤交代に関して、『仙台市史』などの史資料を活用し、教科書で学ぶ歴史的な事象がどのように現代の自分たちの生活に結び付いているのかに気付かせようとした。歴史上の事象を日本の歴史としてだけでなく、地域の歴史として現地の人々の視点で捉えさせようとした。中瀬

や堀田の実践は、地域教材を取り上げることで、歴史に関心を持たせ、自分たちとのつながりから歴史を捉えさせるには有効な実践である。しかし興味関心を持たせることに重点が置かれ、そこから地域を見つめ直し、「地域再生」に結び付けさせる視点はみられない。

前述した三浦、篠塚の4つの視点を参考にし、本研究では「地域再生」を意図した歴史学習の視点として、以下の4つの視点を設定した。

- ① 学習者が歴史上の地域の価値を再評価するプロセスとして授業を構想すること
- ② 質の高い地域教材、史資料を基礎に地域の歴史を総合的・体系的に捉えること
- ③ 学習者自身が学習を通して地域に対する肯定感を醸成し過去の歴史から現代の地域を捉え直し、地域に生きる意味を深く内省する過程として授業を構想すること
- ④ 地域の博物館や資料館と連携して教材開発をし、地域の歴史的価値を再認識すること

上記の視点②については、歴史学習において扱う史資料は多岐にわたる。史資料は過去の証言として構成されているため、その内容を検証し、自分の言葉で再構成することが求められる。認識獲得では、史資料をその特性に照らして適切に活用し、児童自身が歴史解釈を形成することがめざされている。小学校学習指導要領解説では、歴史の理解について「人物の業績や優れた文化遺産を通して捉え、我が国が歩んできた歴史を大まかに理解することである。従って、小学校では歴史を通して事象を網羅的に取り扱うものではないことに留意する必要がある」（p.108）と述べられている。史資料については、「分布や経路などを表した地図や、出来事の経緯を示した年表、事象や出来事の様子を書き記した資料などで調べる」（pp.108-109）とされている。このように、通史的に展開し知識を網羅する歴史学習ではなく、遺跡や文化財、史資料を活用した調査活動を重視する歴史学習が求め

られている。

小学校段階では、子どもたちの生活と歴史事情との距離を縮めるための手段として絵図の活用が有効である。加納（2018）は絵図を活用することにより、歴史を身近に捉え、自分事として考えることができると指摘した。本研究では、自分たちの住む地域を教材化することにより自分事として考えられるように城下町や町割りなどの絵図を資料として活用する。

しかし絵図を提示すれば効果的な学習になるとは限らない。北（2016）は、絵図を活用した歴史学習では視点を提示して分析的に読み取らせることが必要であると指摘している。

史資料の収集やその解釈は専門的な知識を要する。そこで視点④で示したように、本研究では、地元の資料館である亀岡市文化資料館と連携して教材開発を行った。戦国時代における城の役割や立地条件、つくられた戦略的背景などの歴史学的な検証については、亀岡市文化資料館の学芸員と事前に学習内容について協議し、授業づくりを共同で行った。

史資料を基に、子どもに地域の歴史的意義を考えさせることが必要である。そこで、星ら（2020）が提示したカナダの「歴史的思考プロジェクト」の以下の6つの概念を授業構成に取り入れることにした。

①「一次資料の証拠」

史資料を見つけ、選択し、文脈化して解釈する方法を身に付ける

②「原因と結果」

歴史的状況やある人物の行為の原因と結果を考える

③「歴史上の他者の見解」

社会的、文化的、知的、そして当時の人々の感情的な文脈の中で、異質な過去を理解する

④「継続と変化」

過去から今にかけて何が変化し、何が継続

しているのかを考える

⑤「歴史的意義」

歴史的事象の今日的な意義を考える

⑥「倫理的側面」

過去を現在における倫理に照らし合わせてどのように判断するかを考える

①から③は資料読解を通して過去の文脈を明らかにするための概念（過去探究概念）である。過去探究概念は視点②の学習である。一方で、⑤、⑥は大衆の歴史意識を前提にしており、現代社会において人々がいかに歴史を用いて、歴史に向き合っているかを探究する概念（現代探究概念）である。この現代探究概念は視点③の学習となる。また④「継続と変化」は、過去と現代を比較することで、過去の探究と現代の探究をつなげる役割を果たしている。

このように、星らが示した6つの概念を授業構成に取り入れることにより、視点①で示した「学習者が歴史上の地域資源の価値を再評価するプロセスとして授業を構想する」ことができ、「地域再生」を視点とした歴史学習にとって有効である。

星らは6つの概念を取り入れた授業開発までは行っていない。本研究では、この6つの概念を本時の展開にどのように組み込むのかを検討した。

4 研究方法

城は、大抵はどの地域にもかつてあった。現存している例は少ないが、城跡や遺構ならあるはずである。近世以降には城下町を形成し、それが町づくりに反映し、町並み、堀、町名など、当時の様子を窺わせるものも多数残っている事例も多い。したがって、城は町のシンボリックな存在になりうるので、それを中心に自分たちの住む町を再認識、再評価するには適した教材だといえる。教材化は簡単ではないが、地域の資料館や博物館と連携すれば、可能となる。こう

した学習を各地で展開することにより、地域の資料館や博物館との連携を一層促進することにもなる。

本研究で取り上げる城郭の地域教材としての価値は以下のとおりである。

- ・数百年が経過しているのに遺構として地域に現存している（歴史用語との違い）。
- ・具体的な文書の裏付けがある（古墳との違い）。
- ・地域（校区）の生産力が可視化できる（広域を治める近世城郭との違い）。
- ・人・もの・ことが一体化している（明智光秀・亀山城・本能寺の変）。

各地域で教材化する城郭が違うため、亀岡市内に点在する代表的な城郭を6つ選び、2019年度から2020年度にかけて6つの授業プランを作成した。授業プランでは、学習指導案と資料を提示した。さらに、実際に授業プランを使った授業を実践し、授業記録をつけた²⁾。そのことにより、授業プランをもとに授業がしやすいようにした。各地域の6つの授業プランがある

表1 授業プランを作成した城郭

城名	城主	所在地
並河城	並河 易家	大井町
穴太城	赤沢 義政	曾我部町
亀山城	明智 光秀	亀岡地区
八木城	内藤 宗勝	宮前町
数掛山城	波多野秀親	本梅町
笑路城	中沢又五郎	西別院町



図1 モデルプランで取り上げた城の位置

ので、自分の学校の地域に合わせて授業実践ができる。

なお本稿では、亀山城を教材化したプランを事例に取り上げる。

5 城郭を教材化した授業プランの構想

5-1 地域の歴史への関心を深めるための「問い」の条件

歴史学習では、題材として取り上げる人物や文化遺産について、児童の問題解決の活動が動き出す鍵となるような問題でなくてはならない。調べ考え学び始めるための足場となり、自分なりの仮説が生まれてこそ意欲が高まり追究が始まる。そんな学習の起点となり軸となるような「問い」である。そのことにより、児童の中で、言葉の収集・選択・整理が進み、概念化され、見方・考え方へと育っていく。「問い」は、単元を通しての活動に勢いと方向性を与え、ゴールをめざす原動力となる。社会科における「問い」の重要性は、何よりも「課題を追究したり解決したりする活動」の前提として捉えられてきた。単元全体を貫く「問い」そして本時の「問い」、いずれも問題解決的な学習には不可欠である。本研究では、児童が地域の歴史に関心を持つことができる「問い」を以下の条件で設定し、授業づくりの基本に据えて授業開発を行った。

① インパクトがあること

一般的には知っているが自分事としては考えたことがない、つまり遠くの世界の出来事で自分とは関係が無いと思っていたことが、実は自分自身につながっていたと分かった時、児童には大きなインパクトになる。本物を扱う大きな意義がここにある。そして空間的・時間的な距離感（遠くに感じている）が、心理的な距離感（近く感じる）により乗り越えられることになる。例を挙げると

「明智光秀がつくった亀山城は江戸時代に

なっても重要な場所として立派な城になり、亀山城には譜代大名が入った」、それは驚きである。このことが問題解決的な学習の核になる「自分事意識」の形成につながる。

② 自分事になること

堀田(2019)の研究では、地域教材を用いた授業実践を行うことにより、「歴史」を「自分事」として捉える児童数が増えたという調査結果が出ている。中瀬や堀田の研究により、地域教材を教材化することにより、歴史に関心を持ち自分事として考えることができることが示された。

地域にある本物の人物・文化遺産を教材として取り上げると、児童は「地域をより深く知りたい」と思うと同時に、地域をよく知る「自分たちこそが考える必要がある」また「自分たちなら考えることができる」と、自分事として捉えるようになる。こうして身近さや手頃感・親近感から生じた問題意識が、日本史レベルの学習内容につながり、言葉の習得に過ぎなかった内容にイメージや概念が加わって深い学びへとつながっていく。

③ 意外性があること

十分知っている言葉と初めて聞く言葉の組み合わせにより、児童は意外性を感じ、関心を深める。例えば、歴史的な大事件と自分につながる場所や人(城・国衆)との接点から、名前は知っていたり行ったことがあったりしていても、意味はよく知らないことを取り上げるようにする。

④ 多様性があること

様々な観点から検討することにより、思考力が深まり、議論が活性化する。少なくとも2つは問題解決の方向があることが必要である。ただし、その方向は対立的(内容は異なる)でありながらどちらも共感的(妥当性がある)であることが重要である。

5-2 城郭を教材化した授業実践の実際

① 教材名「丹波亀山城が伝えてくれること
- 亀山藩主・松平信豪と学問所・邁訓堂 -」

② 本時の目標

亀山城やその城下町について調べ、戦国時代や江戸時代と亀岡地域との関わりを、身近な視点から理解できるようにする。

③ 教材(亀山城)について

丹波亀山城は、天下統一を進める織田信長から、丹波国進攻を命じられた明智光秀が拠点とした平山城で、京都府の戦国時代を代表する城の一つである。城は町づくりも共に行われたので、亀岡市市街地のほぼ真ん中にあり、周囲に遺構も多く残る典型的な城下町となっている。

亀山城は、明智光秀によって築城されたことが『小畠文書』などの同時代史料からも明らかである。江戸時代は亀山藩五万石の居城として、形原松平氏など譜代大名が入り、明治時代になって伊勢亀山との重複を避けるため、亀山から亀岡になった。

亀山城は、桂川右岸の平野にある独立丘陵上に位置する。独立丘陵に城郭の中心部分を設け、南側に城下町を配する。京都府中世城館跡調査報告書(2014)によると、中心部の曲輪の周囲には内堀が巡り、南側には中堀で囲まれた三ノ丸が接続する。三ノ丸の周囲は、北側を除く三方に城下町を設け、城下町の周囲には惣構を巡らせる。城の北側は、内堀以外に防御施設を設けないが、桂川の河岸段丘崖を自然の防御としていた³⁾。

亀山城は、明智光秀の築城以降も順次整備が続けられ、徐々に近世城郭としての姿を整えていった。羽柴秀俊(小早川秀秋)が城主の時に、本丸・二ノ丸・三ノ丸が整備され、北条氏勝・権田小三郎が城代官の時に、内堀や惣構が完成している。最大規模の整備が行われたのは、岡部長盛による慶長14(1609)

年からの工事で、五重の天守をはじめとした諸施設が天下普請によって整えられた。

亀山城跡は、本丸をはじめとする中心部は後世の改変が進んでいるが、城下町は近世以降の町並みがよく残り、惣構も用水路として形状を伝え、一部には堀と土塁が残存している。なお、惣構の一部は亀岡市指定史跡となっている。

④ 教材としての魅力（教材価値）

【城そのものの魅力】

- ・五層天守の写真（明治初期）や藩校の扁額など、リアリティのある遺物がよく残っている。

・天守跡まで近づき、石垣や天下普請の際の大名刻印などの遺構を間近で見ることができる。

・光秀が築いた城であると共に、江戸期を通じた丹波亀山藩五万石のシンボルであるため、全国的に大変有名である。

【資料上の魅力】

- ・一次資料を踏まえたまとまった資料（新修亀岡市史）があるので調べやすい。
- ・地元資料館（亀岡市文化資料館）の特別展・企画展などの図録もよく整理されていて、閲覧はもちろん入手（購入）可能なものも多い。

表2 教材「亀山藩主・松平信豪と学問所・邁訓堂」本時の展開

単元の展開	歴史的思考概念	学習活動と問い	資料
現在の亀岡と比較しながら、光秀がつくった亀山藩の様子を認識する段階	一次資料の証拠 (過去探究概念) 継続と変化 (過去の文脈と現代社会を関連付ける概念)	1. 城のイラスト図を見せ、城の形をもとに戦国時代をイメージさせる。 ○六つの城を並べて気が付いたことは何ですか。 ○二つのグループに分け時代順に並べてみましょう。亀山城はどちらのグループですか。 ○山城と平城の違いは何でしょう。なぜこの様に変化したのでしょうか。 2. 城の役割と亀山の地形を関連付けて考えさせる。 ○光秀はなぜこの場所に城を造ったのでしょうか。 (段丘の端・主要街道・河川の近く) 3. 今に残る町並みと光秀の城づくりの関係に気付かせる。 ○城だけができたわけではなく、光秀は城下町を形成しました(新しい国づくり)。では、何が残っていれば城下町なのでしょう。 (石垣・城門・堀・町名・鍵の手・食い違い・丁字路・寺院など)	・山城と平城 (熊本城・深大寺城・高天神城・駿府城・姫路城・観音寺城・亀山城) ・亀岡盆地地形図(アナグリフ) ・城下町の名残・遺構(画像・動画) ・「山陰丹府桑田亀山図」 ・「丹波亀山城城下町復元図」 ・「新修亀岡市史町割り地図」
史資料をもとに、江戸時代の亀山藩について認識を深める段階	原因と結果 歴史上の他者の見解	4. 光秀は本能寺の変の後の山崎の合戦で秀吉に敗れたことを確認する。 5. 資料「主な大名の配置図」とつないで考えることで、江戸幕府の政治と地域の歴史がつながっていることを実感させる。	・教科書「主な大名の配置図」
江戸時代、亀山城(藩)にはどんな大名が入ったのだろうか			
	一次資料の証拠 (過去探究概念) 継続と変化 (過去の文脈と現代社会を関連付ける概念)	6. 学校に残る文化財(藩校扁額)から、亀山藩が譜代大名であったことを調べ、藩政の様子について関心を持つ。 ○これをどこかで見たことがありますね。亀岡小学校の玄関に飾ってあります。これは何でしょう。なぜ老中が書いてくれたのでしょうか。 ・「邁訓堂」(亀岡小学校玄関)「廣徳館」(亀岡小学校校長室) ○「邁訓堂」は、六代藩主の松平信豪公がつくられました。歴代藩主の中でもとりわけ教育熱心だったようで、藩を立て直しておられます。 7. 江戸時代の絵図と現在の地図を比較して、藩校があった場所を確認する。 ○藩校の場所を絵図で見つけてみましょう。	・亀山藩藩校の扁額「邁訓堂」(松平定信揮毫)、「廣徳館」 ・亀山城(藩)歴代城主(藩主)系図 ・藩校「邁訓堂」の場所(新修亀岡市史資料編第二巻) ・形原松平六代藩主信豪系図 ・光忠寺(形原松平家菩提寺)画像
歴史を振り返り自分たちが住む亀岡について考察する段階	倫理的側面 歴史的意義 (現代探究概念)	8. 学習の前後での自分の意識の変化に着目し、自分が考えたことを振り返らせる。 ○このように亀岡の町は明智光秀の築城に始まりました。江戸時代は譜代大名の形原松平氏に受け継がれ、藩校を作るなどその政治が続いて来ました。 ○城下町に住む自分との関わりを考え、振り返ってみましょう。	

- ・学習指導要領の「天下統一」「江戸幕府の政治」で扱えるので、教育課程に位置付けやすい。

【立地の魅力】

- ・町の中心部にあり、亀岡駅や南郷公園から堀越しの城跡を見ることができ、見学もしやすい。
- ・旧町内至る処に堀跡（外堀・惣堀）が残り、江戸時代の絵図を参考に大手門や藩校なども含め、現地を訪れることができる。

⑤ 授業の概要

導入では、「6つの城を並べて気が付いたことは何か」を問うところから授業が始まる。6つの城は山城と平城が混ざっており、山城から平城へ、防御（砦・要塞）から利便性（シンボル・役所）に移行していく様子を捉えさせる。

導入は、【現在の亀岡と比較しながら、光秀がつくった亀山藩の様子を認識する段階】としている。「光秀はなぜこの場所に城を造ったのだろう」と問うことで、城の立地条件を考えさせた。段丘の端であること（水害を防ぐ、遠方から見張り）、主要街道が通っていること（軍勢の移動、産業の発達）、川が近いこと（堀、水運）などから、この地がよく考えられた場所であることを理解させる。また、丹波で最初の居城である「余部城（丸岡城）」も同じ条件を備えた場所であることに気付かせる。

次に「山陰丹波桑田亀山図」「丹波亀山城城下町復元図」「新修亀山市史町割り地図」などの絵図を資料として提示する。児童はそれらの資料を比較検討して選択し、城下町の名残や遺構の写真と照らし合わせ、当時の様子を解釈する。このように絵図と城下町の遺構をもとに検討することにより、「一次資料の証拠」から「過去探究概念」が活用される。また、「過去の文脈と現代社会を関連付ける

概念」である「継続と変化」を活用するために、校区にある城下町の特徴を確認する。町割り、町名、石垣、堀、寺院など今に残る町並みと光秀の城づくりの関係に気付かせる。このことにより、自分たちの地域と歴史を結びつけて考えることができ、地域の歴史を総合的・体系的に捉えることができる。

展開は、【史資料をもとに、江戸時代の亀山藩について認識を深める段階】である。まず光秀が山崎の合戦で秀吉に敗れた後の「原因と結果」を検討する。敗者である光秀の居城である亀山城は廃城になるか廃れていくと考えがちである。そこで、「江戸時代、亀山城（藩）にはどんな大名が入ったのか」という本時の学習問題を考える。「歴史上の他者の見解」を活用することによって、当時の文脈で異質な過去を理解するようにする。すると、「都の近く、山陰道の入り口なので重要な大名を置いたはずだ。」「西国大名の動向を抑えるために、徳川所縁の大名を配置しただろう。」「外様大名は置かない。譜代だと思う。」ということが理解できる。

学習問題の検証のため、亀山城（藩）歴代城主（藩主）系図を見ると、城主（藩主）は松平家となっている。ここから譜代であることが分かり、江戸時代になってもここが重要な場所であったことが分かる。このように、戦国時代から江戸時代にかけて亀山（亀岡）が重要な場所であったことを知ることで、地域を見直すきっかけとなる。さらに身近に考えさせるために、亀岡小学校にある亀山藩藩校の扁額「邁訓堂」「廣徳館」の写真提示する。「邁訓堂」は小学校の玄関に飾ってあり、「廣徳館」は校長室に飾ってあるので、見たこともある児童もいる。しかしそれが何を意味するのかは分からない。明治初年以來、学校に保管されている。「邁訓堂」は老中松平定信の書である。教科書にも載って

いる歴史上の人物が書いたものであるという
ことで、児童にとって歴史が身近なものとな
る。このように、「一次資料の証拠」から「過
去探究概念」を働かせ、さらに過去に作られ
たものを見ることによって、「過去の文脈と
現代社会を関連付ける概念」を働かせて、「継
続と変化」の認識を深める。このことにより
地域の歴史的価値を再認識し、歴史上の地域
の価値を再評価することができる。

最後のまとめは、【歴史を振り返り自分た
ちが住む亀岡について考察する段階】である。
六代藩主の松平信豪は教育に熱心で、藩校を
発展させ、藩を立て直した。藩校は各地につ
くられたが、自分たちの住む地域にもかつて
藩校があったことを知り、「歴史的意義」を
働かせることができる。また、この地にかつ
ていた歴史上の人物が亀山（亀岡）のために
尽くしたことを知り、児童は地域のことをよ
り深く考えることができる。これは「倫理的
側面」として過去を現在における倫理に照ら
して考える機会となる。さらに、信豪にとっ
て老中松平定信は母方の祖父であり、信豪は
井伊直弼の舅である。歴史の表舞台で活躍し
た人物とかかわりが深い人物が亀山（亀岡）
にいたということも歴史を身近に感じるこ
とができる。

星によると「現代探究概念」は「現代社会
において人々がいかに歴史を用いて、歴史に
向き合っているかを探究する概念」としてい
る。亀山城は亀岡の市民にもあまり知られず、
その価値はあまり認められていなかった。本
時の学習問題により、亀山城が重要な城で
あることに気付き、自分たちの住む町にある
亀山城を誇りに思うことができる。

このように自分たちの住む地域の過去の歴
史を掘り起こすことで、歴史に向き合うこ
とができ、過去の姿から現在を考える「現代探
究概念」を働かせることができる。このこと

により地域に対する肯定感を醸成し過去の歴
史から現代の地域を捉え直し、地域に生きる
意味を深く内省する過程として授業を構想す
ることができた。

⑥授業後の児童の感想

児童の授業後の感想には「自分の地域の歴
史も日本全体の歴史の重要な一部であり、大
切な場所であると知った。自分の町が城下町
であることはすごいと思った。」「感じたこ
とは、亀山城は全国（日本）にとって重要な
ものであり、私たちにとって欠かせないもの
ということです。」「はじめはこんなお城が…
と思いましたが、まさか亀山城がこんな重要
な城だとは思っていませんでした。」とい
う記述がみられた。自分たちの住む町を見
直し、児童が当事者意識をもって自分たちの
住む地域を考えられるようになった。また、「明
智光秀がしたことは、今の自分たちのくらし
につながっていることが分かった。」と過去
の歴史とのつながりから現在をつなげて考
えられている児童もいた。さらに、「亀岡の歴
史はあまりすごくないと思っていただけ、勉
強してみると意外と奥が深いということが
分かった。この勉強をして、亀岡の歴史を
知って来年の大河ドラマが見たくなりました
（2019年当時）。これから先もいろいろ調べ
てみようと思いました。」という意見も見
られ、過去からのつながりで亀岡のこれから
を考えることができている児童もいる。2019
年当時はNHK大河ドラマ「麒麟がくる」が放
映されることが決まっていたので、「地域再
生」の視点からも児童の関心は高まった。

⑦考察

授業後の感想にみられるように、児童は
亀岡が歴史上重要な場所であるとは思ってい
なかった。亀山城跡については知っていたが、
それがどういう城だったのかについては知ら
なかったし、関心もあまりなかった。授業を

通して、歴史上の人物でもある明智光秀が建てた城であり、城の建設と共に城下町も形成され、現在の亀岡の原型ができたことが分かる。それは今も残る町並みや遺構から、その面影を知ることができる。

こうした城跡や遺構は過去と現在を結びつけ、自分たちの住む地域について改めて考えるきっかけとなった。日本全体の中の亀岡市、つまり自分たちの地域との関わりとして歴史的な事象を捉えさせることができた。亀岡にそれほど愛着を感じていなかった児童も、授業を通して亀岡に誇りを持ち、亀岡のことをもっと知りたいと思うようになる。また、身近な地域を取り上げることによって、歴史に関心を持ち、児童が当事者意識をもって自分たちの住む地域を考えるようになった。地域教材の活用は、自らに引き寄せて歴史を見る目を養い、自分事として歴史を捉えさせるのに有効である。

6 成果と課題

過去にその地域が繁栄していたことや歴史的な舞台として意義がある地域であることを知ることにより、自分たちの住む地域を誇りに思い、地域を見直す契機になった。地域の歴史を掘り起こし、教材化することにより、「地域再生」の視点からの歴史学習が展開できる。身近な地域を取り上げることで児童の学ぶ意欲を喚起させることができた。

亀岡市においては、これまで地域資源の活用がなかなかできていなかった。本研究は、「地域再生」の視点で地域教材の開発を行い、歴史学習の新たな展望を切り開いた。

しかし児童が当事者意識をもって自分たちの住む地域を考えるようになったのか、地域の再生について考えるようになったのかについては、授業の感想にみられる記述の範囲内でしか判断できない。本実践は試験的に行った授業実

践であるので、質問紙調査など統計的なデータは取れていない。本研究は、学習プランの開発と実践に留まっている。今後は実践の分析を通して学習効果を検証していきたい。

【註】

- 1) 例えば、『社会科教育研究』第131号、日本社会科教育学会、2017では、「地域再生に向き合う社会科教育」という特集が組まれた。
- 2) 授業実践は、当該地域の小学校の6年生のクラスを借りて、亀岡市教育研究所指導主事（当時）の山下正己が実施した。
- 3) 京都府中世城跡調査報告書、2014及び亀岡市文化資料館館長、鶴飼均氏からの情報提供による。

【参考文献・引用文献】

- 橋本祥夫編著（2020）『京都・宇治発 地域協働の総合的な学習－「宇治学」副読本による教育実践－』ミネルヴァ書房
- 星瑞希・小野創太・松村一太郎・渡邊和彦（2020）「現代社会における歴史論争問題に取り組むための授業構成－セイシャスらの「歴史的思考プロジェクト」に着目して－」『社会系教科教育学研究』No.32, pp.91-100
- 堀田幸義・堀田理永（2019）「小学校の歴史教育における地域教材の活用と主権者意識の醸成」『宮城教育大学紀要』53, pp.1119-138
- 堀田幸義・堀田理永（2020）「小学校社会科における歴史教育と地域教材－参勤交代を事例に－」『宮城教育大学紀要』54, pp.107-132
- 加納慶士（2018）「小学校社会科歴史分野における絵画資料の活用を軸とした単元開発と実践」『静岡大学大学院教育実践高度化専攻成果報告集抄録集』8, pp.37-42
- 北俊夫・向山行雄（2016）『アクティブ・ラーニングでつくる新しい社会科授業』学芸みらい社
- 前田賢次（2017）「地域をともにつくる教育実践の現状と課題－小学校段階における社会認識形成

と地域への関与をめぐって－』『社会科教育研究』
No.131, pp.25-38

峯岸由治（2010）『「地域に根差す社会科」実践の歴
史的展開と授業開発－授業内容と授業展開を視点
として』関西学院大学出版会

三浦博英・篠塚明彦（2017）「地域学習は「地域再
生」の基礎となりうるか－青森県における教育現
場での実践を通して考える－』『社会科教育研究』
No.131, pp.13-24

文部科学省（2018）『小学校学習指導要領解説 社会
編』, 日本文教出版

中瀬雅之（2019）「歴史っておもしろい自分事として
捉える歴史学習」『社会科教育』No.720, pp.66-69

竹内裕一（2017）「「地域再生」を担う人材育成をめ
ざす社会科授業－学校と地域を結ぶしくみづくり
からの提言－』『社会科教育研究』No.131, pp.1-
12

土屋武志「地方史学習」『社会科重要用語 300 の基礎
知識』明治図書

（令和3（2021）年12月7日受理）

Abstract

Development of elementary school history learning intended for “Community Regeneration” - Hometown Learning “Kameoka Gaku” Kameyama-jo Castle plan example -

Faculty of Child Education, Kyoto Bunkyo University Yoshio HASHIMOTO

Kameoka City Future Educational Research Center Masami YAMASHITA

In Japan, society is expected to change drastically due to the declining birthrate and aging population, and issues such as population decline and financial difficulties are expected to become more serious. As a result, “regional revitalization” has become an urgent issue for each local government. Against this background, “hometown learning” is being developed in various places around “time for comprehensive learning” so that children can become attached to the area where they live and become the future leaders of the area. In Kameoka City, Kyoto Prefecture, hometown learning “Kameoka Gaku” has been implemented based on the Education Promotion Basic Plan, but the current situation is that it is rarely practiced in social studies.

Regarding historical learning, there are many examples of taking up regional historic sites and cultural heritage as teaching materials, but there are few examples of taking up from the perspective of “regional revitalization.” We are proud of the area we live in by knowing that the area has prospered in the past and that it is a meaningful historical stage in the situation where the area is declining due to the declining population. It will be an opportunity to review the area. By digging up the history of the region and using it as a teaching material, history learning from the perspective of “regional revitalization” can be developed. By picking up familiar areas, children can be motivated to learn.

Castles were usually once in every area. There are few existing examples, but there should be castle ruins and remains. Since the early modern period, castle towns have been formed, which are reflected in town planning, and there are many cases in which many things such as townscapes, digging, and town names can be seen at that time. Therefore, since the castle can be a symbol of the town, it can be said that it is a suitable teaching material for re-recognizing and re-evaluating the town in which we live. It is not easy to use as teaching materials, but it will be possible if we cooperate with local museums and museums.

It is necessary to develop history learning from the perspective of “regional revitalization” by digging up the history of the region and using it as a teaching material. The purpose of this study is to develop history lessons from the viewpoint of “regional revitalization”, focusing on the castles of the region.

Key words : Community Regeneration, Hometown Learning, Community Learning,
History Learning, Castle